

個性理解における投影法 ーロールシャッハ・テストについてー

福 山 逸 雄

筆者がロールシャッハ・テストに出会ったのは沖縄の日本復帰前、今から32年も前のことである。琉球政府立沖縄教育研修センターに研究主事として相談業務にかかわり始めた頃で、講師は、当時、東京都立教育研究所の指導主事をしておられ、日本政府から国民指導員として派遣された昌子 武先生であった。8名の中学校の長期研修員の教師たちとともに1ヶ月間、ロールシャッハ・テストの基礎講座を受講することになった。それ以前、筆者がある中学校へ赴任して間もない頃、その中学校の教育相談担当の教師がロールシャッハ・テストに熱心に取り組んでいた関係もあって、このテストの概略はほぼ理解していた。しかし、一緒に取り組んでいた教師たちは、このテストの名称は聞いたことがあるという程度のもので、講座への参加はもちろん初めてであった。全員がかなりの興味と関心を持って、学習に熱心に励んだ。しかしセンターでの研修期間を終え、学校現場へ復帰してからは、指導者不在と忙しさを理由にテストを継続的に学習するものはなく、ついに全員がテスト研究から離脱していった。筆者は、相談業務に携わっていた関係もあって、試行錯誤を繰り返しながら、何とかテスト法をマスターすべく自分ながらに努めた。しかし、このテストの理論を理解し、実施・解釈ができるようになるまでには少なくとも4～5年もの歳月を要すること、東京にはロールシャッハだけを研究する会があるほどだと聞いた時、限りある人生、このことで4～5年も費やすのはもったいない、もっと別のことを優先しようとの思いから、筆者も、ついにはロールシャッハ研究を離れることになった。しかし、3年前、本大学へ赴任し心理カウンセリング専攻学生を直接担当するようになってから再びロールシャッハに挑戦することになった。

現在、ロールシャッハ・テストの信頼性や妥当性、解釈の問題を課題として研究を進めているが、本稿ではその過程で感じたこと、このテストの目的は何なのか。人間の何を測定しようとしているのか。他のテストに比べてどのような特徴を備えているのか。テストの実施、分析、解釈の方法や問題点などについて概観してみたい。

1. 人間の知覚の世界を知る

空に浮かぶ雲を見て、「なんとなく熊に見える」とか、あの雲は地図上の「イタリアみたいだね」とか、このようなことは誰しも経験することであろう。筆者の場合、株式投資に興味・関心が高いため雲に限らず、ある視覚刺激に触れて、その対象がブル(牛)に見えたり、ベ

ア(熊)に見えることが多い。ブルはニューヨークのウォール街では下から上に突き上げる株式市場の上げ相場を意味し、ベアは上から下の方向へ押さえ込む下げ相場を意味する。また同じ刺激を見ていて、それが見る人によって見え方が違うこともよく経験することである。それはなぜだろうか。ロールシャッハのインクプロットという刺激に対して、ある人は、その中に人間を見て、ある人は動物を見る。また、ある人はインクプロットカードの中に、ある種の動きを感じ、ある人は刺激の持つ色に敏感に反応する。カードのインクの濃淡に反応する人もいる。人間の心には、刺激に対してさまざまな反応を生み出す機制が存在するといわれている。筆者が雲に限らず、ある視覚刺激に対してブルを見たり、ベアを見たりするのは筆者自身の欲求の投影だと思われる。

もう1つ例を示そう。中学校の古代史における中国・朝鮮と日本との関係を教えるのに、ある中学校の社会科教師は次のように説明したという。「日本という国は、中国というお母さんから栄養を吸って育った赤ちゃんみたいなものだ。その証拠に(朝鮮半島を指さして)ほら、こんなにいいおっぱいがついているだろう。」「あっ、それで九州(吸収)っていうのか！」教室中が爆笑したという。この教師は、授業作りにとっても熱心で、どうすれば楽しく記憶に残るような授業が実践できるか、日ごろから創意工夫を凝らしていたに違いない。

人というものは、その人なりの独自の世界を持っており、それに応じて、ある刺激に対して、その人独自の解釈をしたり情緒的反応を示すと言われている。この社会科教師は、東アジアの地図という刺激に触れて、そこから得たアイデアを授業作りに生かしている。このことを通して、教師の授業に対する思い、動機が理解できる。さらにはこの教師のパーソナリティの一端を垣間見る思いがするのである。

2. ロールシャッハ・テストの特徴

- (1) 検査者と被験者との人間関係が、テスト結果に影響を及ぼすことは一般的に知られている。知能テストでも影響を受けるわけだから、ロールシャッハの場合、その影響は、さらに大なるものがあることは十分に予想される。
- (2) 反応にはどれが「正答」でどれが「誤答」かの基準はない。「回答なし」も「反応拒否」も、それなりに有意義な情報として解釈に生かされる。
- (3) どう反応すれば、どう評価され、解釈されるかということが被験者に明らかではないために意図的に反応を歪めることが少ない。
- (4) 知能テストや二件法、三件法の性格テストの場合、その結果の解釈には、統計的根拠に基づいた基準があるが、ロールシャッハの場合、それに加えて検査者の直感や洞察力がより強く求められる。
- (5) 人格の表層的な部分から深層的な部分に至るまで幅広くしかも深く把えることができる。

- (6) 被験者の知的レベル、病的症状や予後の推測もある程度可能である。
- (7) 検査者のテストに関するより高度な専門知識と経験、さらにはテストに関する高度な習熟度が求められる。
- (8) 反応が自由なため、被験者の独自性が現れやすい。
- (9) 被験者の欲求・動機やパーソナリティの全体像が捉えられる。

3. インクプロットカードの持つ特徴

(1) 「多様性」と「共有性」

刺激に対する反応がきわめて多様である。もともと刺激素材として用いられるインクプロットは、偶然にできた数多いしみの中からいろいろな見え方をする10枚を厳選して構成されたもので、「多様性」をその特徴としている。それと同時に、図版の中には被験者に比較的共通して見られるという「共有性」もその特徴としてあげられる。

(2) 「偶然性」と「必然性」

刺激図版は計画的に作られたのではない。テストは偶然にできた図版の中から厳選されたもので、「偶然性」と同時に、インクを紙にこぼして中央で折り曲げて作られたという構造的な「必然性」をも併せもっている。こうした一見、矛盾するようなロールシャッハ・テストの特徴的性格ゆえに、被験者の無限に近い連想が語られる。その中からその個人を理解する上で役立つさまざまな情報を引き出すことが可能となる。

4. テスト結果の分析

まず始めに、被験者のロールシャッハ反応をルールに従って記号化する。このことは、反応の内容をいくつかの特殊な記号という抽象度の高い概念をもつ言葉に置き換えることを意味する。この記号化をもとに形式分析が行われる。被験者によって一つの図版から多くの連想が語られる。図版のエッジ部分がカニの足に似ていると刺激の一部に反応する人や、全体的な形に反応する人がいる。昆虫たちが群を成して笛や太鼓を打ち鳴らしながら踊っていると、図版の中に躍動感を覚えるものもある。鹿児島県種子島の宇宙基地から炎を噴射しながら、ロケットがまさに飛び立つ瞬間と答えた人は、そこに動きを感じると同時に黄色い炎という色合いを感じている。このように被験者の反応はさまざまだが、これらを可能な限り詳細に記号化し、統計的分析が行われて、解釈に役立てられる。

被験者の反応内容はどうなっているのか。それらの内容を重視し、分析するのが内容分析である。これを進めるには、各カードの特徴を十分に理解していなければならない。カードの中には、人間が連想されやすいもの、動物が連想されやすいものなどの特徴がある。反応内容に見られる被験者の独自性や反応の持つ象徴性を理解するためには、検査者のテストに

関する専門性をしっかり身につけている必要がある。

ロールシャッハ・テストカード10枚の提示する順序は決まっています、その順序を勝手に変えることは許されません。これはテストの実施の標準化の問題で、その趣旨に沿って行わなければならない。こうした提示順序の流れの中で被験者の変化は、反応時間や内容面で現れてくる。これらのことを詳細に分析することによって、被験者の全体像が継時的観点から理解される。さらに直接反応には見られなかったテストの実施中の表情や態度も被験者理解の重要な情報として、テスト解釈に活用される。

解釈とは、被験者の情報や数量化されたデータと、その個人の治療に役立つように、より具体的な情報内容におきかえることである。ロールシャッハ・テストでは特に本人が刺激を「どのように知覚しているのか」、その刺激に対して「どのような意味を体験しているのか」ということを確認しながら解釈がなされることになる。このテストの利点は、何よりも情報を幅広くしかも奥深く得られる点にある。しかしその解釈には、配慮しなければならないいくつかのポイントがある。

- (1) まず大事なことは、本テストの反応は検査者と被験者との二人の人間関係の中で生まれた反応だという点にある。反応は、ただ単にその場で提示された刺激に対するものだけではない。二人の間のかもしだすその場の雰囲気や状況が何らかの影響を与えていることを肝に銘ずる必要がある。こう考えると、検査者が違うごとにテスト結果が違うのではとの批判がでるに違いない。このことが、このテストの信頼性の問題としてしばしば取り上げられ論じられることになる。ロールシャッハ・テストの信頼性の問題に関しては、項を改めて述べることにしたい。

このテストを開発したロールシャッハが最も興味を持ち、重要なこととして関心を払っていたことは、人間が生きている世界を「どのように知覚しているか」、「どのように体験しているか」であった。その人独自の知覚の仕方や体験の世界を知ることを通してその個人を理解することに主眼がおかれた。

- (2) さらに解釈で大事なことは、「無反応」や「反応拒否」をどう取り扱うかという点である。それをまったく何の情報も得られないものとみなすか、またそれらも個性を表現する有意義な内容として解釈に生かすかの問題である。もちろん生かすことが大切で、そのことによって個人の独自の世界を把握し、より正しい理解が可能となる。さらに理解の精度を高めるため、反応結果がさまざまな角度から分析検討される必要がある。それに加えて、その個人の生育歴を把握しておくことが大切で、そのことによって、より妥当性の高いテストの解釈結果が得られることになる。

5. ロールシャッハ・テストの信頼性と妥当性

テストの妥当性とは、あらかじめ測定しようとする意図した目標を、的をはずさず的確に測定しているかどうかに関する概念である。例えば、英語のテストにおける妥当性とは、英語力をきちっと測定することが可能かどうかにかかわる問題である。英語力を弁別するのがテストの狙いであるならば、英語の学力が高い人は高いなりに高得点を取り、学力の低い人は低いなりに低い点数しか取れないのがいいテストの条件で妥当性の高いテストと言える。

テストの信頼性とは、いつ測っても、誰が測っても安定的に同じ結果が得られる性質のことである。こう考えると、真偽法や多肢選択法などの客観テストは論文形式のテストに比べて信頼性が高いと言える。しかし信頼性の高いものが例外なくいつでも妥当性が高いとは限らない。例えば、人間には癖というものがあり、ある本の幅を測るのにいつでも若干メジャーを斜めに測る癖があるとすれば、何度測っても安定的な、ほぼ同じ結果が得られることになり、信頼性は高くなる。しかし正確に本の幅を測っていることにはならない。本の幅より若干幅広く測定されることになるので、妥当に本の幅を測定したことにはならない。したがって、信頼性の高いものが必ずしも妥当性が高いとは言えない。

ロールシャッハ・テストは信頼性・妥当性という観点からどう考えたらいいのだろうか。このテストは非科学的であるとの批判をしばしば受ける。それは信頼性や妥当性という視点から述べられた批判である。ロールシャッハ・テストは、その反応だけを統計的に処理すれば確かに信頼性は高くなるはずである。しかし、このテストが測定しようとするものの中には、その時々々の情緒とか葛藤などを含んでいる。テストの基準は、その個人の属する集団の基準ではなく、その個人の中であって、その個人を動かしている個性的な法則と考えられる。検査者の主観性を排除することを理由に統計的な手法が用いられることが多いが、それに過度に依存することなく、やはり究極的には検査者の積み重ねられた経験と人間理解に基づく洞察力に期待すべきであろう。他のテストに比較して、より深い知識と経験、周到な訓練が必要とされるゆえんである。

[参考文献]

- 佐治守夫・岡村達也・保坂 亨 1997 カウンセリングを学ぶ 東京大学出版会
市川伸一 1991 心理学測定法への招待 サイエンス社
吉岡一郎 1985 あなたの心理学 北大路書房 174
村上宣寛・村上千恵子 1995 ロールシャッハ・テスト 日本文科学社
東洋・大山正・詫摩武俊・藤永保 1970 心理学の基礎知識－補修と復習のために－
有斐閣ブックス

The Rorschach Test for Understanding Individual Persons

FUKUYAMA, Itsuo

In interpreting the Rorschach, one is interested in how the response, or percept, is formed, the reasons for the response, and its content. The basic assumption is that the way individuals form their perceptions is related to the way they generally organize and structure stimuli in their environments. The Rorschach Test presents an ambiguous stimulus to which the person may respond as he or she wishes. Because the stimulus is ambiguous and does not demand a specific response, it is assumed that the individual projects his or her personality onto the stimulus and thus reveals something about himself or herself.

However, there are some problems with The Rorschach Test. These are problems of the validity and reliability of the test results. In this report, I will try to discuss a little about this issue of the test.

Key words

projective test, perception of the world, validity, reliability unconscious wishes, motivation, conflicts